

# 70代で献身し無牧教会に赴任

日本基督教団杵築教会 主任担任教師

金森 一雄



## 与えられた主のつとめ

東京神学大学大学院2年次、修士論文の提出を終えると、神代学長との赴任予定先面談がありました。学長から「キツキ教会に赴任していたかどうかと思います」と告げられ、間髪を入れずに「かしこまりました」とお答えしました。長い社会生活の中で、社員の赴任先案を作成する労苦については重々承知していましたが、ましてや主のご用のために献身する自分のことでしたから、家族での祈りの中で、赴任先の打診があれば一発回答をさせていただこうと示されていきました。

神代学長から、「何か質問はありますか？ すぐ回答をいただかなくても、ご家族と相談されてから回答としていただければいいですよ」と言われましたので、「赴任先をお聞きできる時のことをずっと祈ってまいりました。赴任先をお聞きできたことに感謝しています。ところで、キツキ教会の情報は全く持ち合わせていないのですが、聞き間違えがあるといけませんので、どのような漢字を書くのでしょうか？」とお尋ねしました。

そして翌朝、学長室をお尋ねし、大分県杵築市の杵築教会に夫婦そ

ろって赴任させていただく感謝の祈りを始めたことをお伝えしました。教会においては牧師や役員の定年制を導入している教会もありますので、まずは75歳になる自分に赴任先が与えられたことに感謝しました。それは主から、杵築教会に教師として招かれる居場所があることを具体的に示されたひと時でした。

その5日後、当時杵築教会の代務（次の牧師が決まるまでのつなぎ役）をしておられた宇佐教会の竹井真斉牧師が『日本伝道を担う青年の集い2023』の発表者として東京神学大学に来られましたので、杵築教会



杵築教会

の総会資料などとともに、2年間牧師不在となつてゐることと今回の牧師招聘に至る経緯と教会の現況についてご説明いただき、九州教区大分地区において共に主の栄光が現わされますようにと、祈りを合わせるこ

とができました。主のなさることは、時に適つてすべて麗しい！一週間もしないうちに、あつという間に自分が九州男子に変身していくように感じられました。

その後、杵築教会からは、2023年11月26日(日)に夫婦そろつて来て欲しいとの連絡がありました。いわゆる「お見合説教」です。教会の責任役員は5人。初めてお目にかかり、ご挨拶をさせていただいたのですが、そのうちの2人から「団塊の世代の同期生です」と告げられ、自分の居場所が用意されていたことを知って、赴任への不安が一気に消えていきました。

当日の礼拝出席者は、教師を除いて16名。入院中とお聞きしていた方も出席されていて驚きました。もちろん、初めてお目にかかる会員ばかりでした。血縁も地縁もない、見ず知らずの地において、新しい教師

の赴任先としてキリストの「縁」が示されたことは、私たち夫婦にとつて、神様への感謝と喜び以外の何ものでもありません。

その日の夜は、「新しい課題も日々のわざも、十字架を負われた主が与えられたつとめとして励んでゆこう」(讚美歌21 516番4節)と、老夫婦二人で賛美を捧げました。

### 救いから献身へ

22歳から銀行員として社会人生活を始めた私にとって、45歳で洗礼に与ることができたのは何よりも大きな奇跡でした。1994年1月に東京ドームで行われたビリー・グラハム国際大会に、チラシ一枚を手にして参加しました。その日の説教は、ヨハネによる福音書4章のサマリヤの女の話でした。それまで、教会に通っていたわけではありません。しかし、「まことの礼拝をする者たちが、

霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」(ヨハネ4・23)という言葉を聞いて、自分の中にいると感じました。説教が終わって、招きの時がありました。私はその意味も分からないまま、観客席からグラウンドに降りて行きました。今思い起こしても不思議です。

こうして私は、自宅近くの教会に行き始めました。最初に訪ねたのは自宅の一駅南側にあったJ.E.C.A.白岡福音キリスト教会で、その後、シグリスト宣教師がスイスに転任して教会も無牧となり、自宅の一駅北側にあった久喜福音自由教会に行くようになりました。すると、栗原延元牧師も仙台に転任することとなり、栗原先生の久喜での働きの最終日となる1994年11月27日(日)に洗礼を授けていただきました。久喜福音自由教会も無牧となり、私の教会生活は無牧の状況で始まりました。

一方、銀行員としての私の環境は、洗礼を受けてから大きく変わっていききました。ちょうどバブルの崩壊が始まり、経済的な破綻が日本中を覆い始めた時期でした。洗礼を受けたばかりの私には、企業の悪腫や病巣の切除手術をする仕事や手術後のリハビリに関係する職務が与えられました。バブル経済の只中ではとてもマイナーな職務でしたが、バブル崩壊とともに自己破産や事業再生、企業再編といった言葉が使われる頻度が急速に高まりました。

失われた30年とは、バブル崩壊以降の長期的な景気の停滞のことです。1995年には、1ドルが80円を割り込む超円高の状態となりました。円高となれば輸出産業が打撃を受けるため、景気が落ち込みました。そして、1997年には山一證券が法令違反となる決算が明らかになり自主廃業、北海道拓殖銀行(拓銀)は

ホテル事業などへの投資の失敗などで経営破綻するなど、有名企業が次々に苦境に陥りました。そして、2001年9月11日に起きたアメリカの同時多発テロ事件、2008年9月には大手証券会社のリーマン・ブラザーズが経営破綻となってリーマン・ショックが起こり、世界的な不況が広がりました。

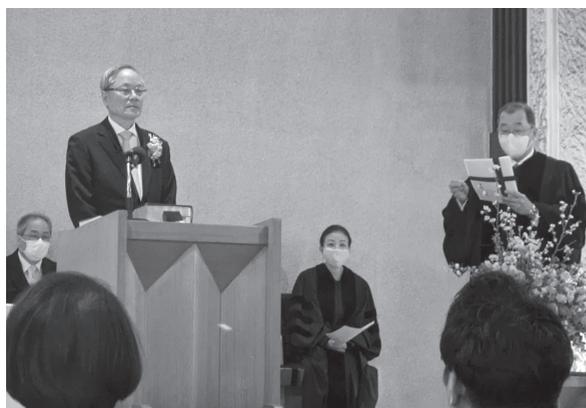
この失われた30年の間に私はクリスチャンとして新生し、クリスチャンの交わりに加えさせていただきました。当時は、金貸し業のクリスチャンがどうなっていくのか楽しみだと、周囲の先輩クリスチャンから励まされました。

それから30年、教会は転居に伴って日本基督教団の教会に通うようになっていました。そして、かねてより献身の道を歩みたいと祈っていましたから、70歳を迎える2019年

が近づき、霧のようなうれいも、やみのような恐れもなくなり、銀行を退職後に勤めていた食品会社の社外常勤監査役の務めを終えることになりました。先ず妻と相談しました。その時が来たのですねと、快諾を得ることができました。出身銀行の協力を得て、後任者も用意されました。そして、2020年4月に東京神学大学に編入することが許され、その準備が整いました。時に適ったのでしょうか。主が用意してくださった道は、驚くほど平坦な道でした。神学校での学びでは、ギリシャ語、ヘブライ語、ラテン語にチャレンジしました。コロナ禍の中、リモートでの語学履修は大変でした。しかし、同じ危機意識を共有する良き学友に恵まれ、リモートでの自習の輪が深まり助けられました。独学では続けられなかったかもしれません。

聖書神学、組織神学、歴史神学の

学びでは、自分の頭の頑なさや年を重ねたが故の自分の高慢さに気づかされました。幼子のように神に向かう姿勢が問われていることを実感し、自分が30年も聖書を学んできているのに、分かっていないことだらけであることに気づかされました。しか



東京神学大学の卒業式にて

し、分からないことは恥でもなんでも無い、知りたいと願ひ、立ち止まり佇む。主はすべてご存知なのだから、諦めずに忍耐をもって学び続けることの重要性を学びました。

### 「向こう岸に渡る」

2024年4月、大分県にある日本基督教団杵築教会に遣わされました。杵築市は人口2万7千人ほど、武家屋敷群のある城下町で、小京都でもあります。そして杵築教会は、1889年の伝道開始日を創立記念日として、創立135周年を迎えました。礼拝堂も1923年にメレル・ヴォーリズ的设计によって建てられ、1990年には創立百周年記念事業としてヴォーリズ設計事務所によって現在の礼拝堂が設計され、奉獻されました。

私たち杵築教会では、何よりも、主なる神に真を尽くして礼拝をささ

げること第一にしています。み言葉を聴き続ける群れとして、共に主の光の中を歩み続けられますようにと祈り求めています。主日礼拝を大切にし、特別な事情がない限り教会員全員が毎週、説教で語られるみ言葉をに耳を傾け、一人ひとりが主の導きを問い続けています。説教要旨は週報と教会のホームページに掲載されています。また、介護施設に入居しておられる信徒の方々にも、週報と説教要旨を手分けしてお届けしています。

教会の面では、教会員の小さなニーズにも対応できるように、教師（牧師）による訪問礼拝や家庭集会、訪問聖餐を大切に行っています。そして、教師と信徒とのダイレクトな対話と祈りを大切にするため、信徒一人ひとりの都合を尊重した個別面談を従<sup>しんよう</sup>憑<sup>よう</sup>しています。

教会の交わりにおいては、主イエ

スが今なおこの世界で生きておられたら困っている人を実際的な方法で助けられるだろうと考え、それを私たちも実践できるようにと願っています。教会員一人ひとりが神の愛（アガペー）を受け取って、日々の生活を主の恵みに感謝して歩むこと。そして、互いに神に愛されたかけがえない存在として認め合い、愛を実践することを目指しています。

杵築教会は「ビジョンは大きく、行動は足もとから。神の子として、心を高くあげよ！」が合言葉です。そして、讃美歌21の18番「心を高くあげよ」と、385番「花彩る春を」が教会の愛唱歌です。

「心を高くあげよ」

1. ころを高くあげよ。  
主のみ声にしたがい。  
ただ主のみを見あげて、  
ころを高くあげよう。

2. 霧のようなうれいも、  
やみのような恐れも、  
みなうしろに投げずて、  
ころを高くあげよう。

3. 主から受けたすべてを、  
ふたたび主にささげて、  
きよきみ名をほめつつ、  
ころを高くあげよう。

4. おわりの日がきたなら、  
さばきの座を見あげて、  
わがちからのかぎりに、  
ころを高くあげよう。

赴任して1年、遣わされて感じるのは、やはり地方で伝道することの難しさです。市全体に少子高齢化が進み、人口も減り続けています。私の中に、たましいの収穫を「信じた」と思うと同時に、「駄目かな」とも



幼児祝福式

思ってしまう弱さもあることを告白します。教会では、マルコによる福音書の連続講解説教をさせていただけました。この教会で長い信仰生活をしてきた方が多いので、無牧であった2年間を踏まえて、何よりも主イエスご自身を知ることがを願ひ、毎週の説教を準備しました。その中

から、一つの聖書箇所を取り上げ、証しさせていただきます。マルコによる福音書4章35節から、説教題は「向こう岸に渡ろう」です。

時は夕方。主イエスは、激しい嵐が到来することを予期されていたでしょう。弟子たちの中には少なくとも四人の漁師出身者がいましたから、夜にかけての天候の悪化を予期していたかもしれません。その中で、主イエスは「向こう岸に渡ろう」とおっしゃったのです。誰も、向こう岸のどこに向かうのか、何をしに行くのかも主に尋ねず、「向こう岸」に漕ぎ出しました。すると激しい突風が起こり、舟は水浸しになって、漁師出身の弟子たちの手でもコントロール不能になりました。しかし主イエスは艫の方で枕をして眠っておられました。弟子たちは「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言っ、イエスを起こしまし

た。舟の操縦についてのベテランが、主イエスを起こしたことは、主イエスが自分たちを溺れさせるはずはないという信仰の証しだと思います。

金融機関に長くいましたので、企業や個人の経済的破綻を多く見てきた私には、地方都市の現状から、あの弟子たちのように、「状況の悪化」を割と正確に見通すことができるのかもしれない。それが傲りとなっている部分もあるでしょう。しかし私も、「向こう岸に渡ろう」と言っ、くださる主イエスの声を聴いて、関東から離れた九州に赴任したのです。もし困難に感じることが起これば、自分の力ではなく主イエスに頼る、困難を神様からいただく愛の試練として受け止める、その信仰をもって主イエスに聞き従う謙遜な者でありたいと願っています。

